

大阪市立大学生生活科学部紀要 第49巻 (2001)

フリーターと大学生の心理的特性に関する研究

－人生満足度と自我強度、不安と生き甲斐に関する調査からの一考察－

篠田美紀 萬本左比 犬尾卓也 角野善宏

A study on psychological character of Freepart time jobs and university students
－Satisfaction with life, Ego-strength,
anxiety and the purpose in life－

MIKI SINODA・SANAMI MANMOTO and TAKUYA INUO・YOSHIHIRO KADONO

1. はじめに

今日の青年期を巡る心理的状况を検討する際に、フリーターの増加という社会的現象を無視することはできない。『労働白書』(2000)によると¹⁾ 2000年のフリーターの数は、男性61万人、女性90万人の合計151万人で、1992年に報告されている101万人から計算すると5年間に50万人増加していることになる。また、社会福祉審議会の「社会的な援護を要する人々に対する社会福祉のあり方に関する検討会」報告書(2000)においても²⁾、1955年にはまだ存在していなかったフリーターというカテゴリーは1975年には50万人と報告されており、1995年には151万人と、およそ20年の間に約3倍に増加している。

一般には、フリーターという言葉はフリーアルバイトを指し、「フリーアルバイト<和製英語> 定職を持たず、アルバイトで生活している人」(旺文社 国語辞典 第8版)とされている。この『フリーター』という言葉は、1987年にアルバイト情報誌 フロム・エーによる造語として生まれたといわれ、当時、増加の傾向にあった一学校を卒業しても定職に就かず、アルバイトで生計を立てる若者たちを総称して名づけられた。この時の定義には、「何らかの目標を実現させるため、あるいは組織に縛られない生き方を望んで、あえて正社員でなくアルバイトを選ぶ若者」という意味合いが含まれていたという。

その後、労働省の『労働白書』(2000)では³⁾、仮にとして、フリーターの定義を1) 年齢15歳～34歳、2) 勤め先における呼称が「アルバイト」もしくは「パート」である雇用者で、男性は就業年数が1～5年未満のもの、女性については未婚で、仕事を主にしているものと定義している。本報告においても労働白書に従ってフリーターを定義することにする。

これまでの青年期研究では対象は主として大学生であることが多かった。青年期の心理的特徴は言い換えれば大学生の心理的特徴と理解されてきたように思われる。しかし、これまで述べてきた様なフリーターの増加を考慮に入れた場合、学籍を持つ大学生と、同じ青年期にあって学籍を持たず、アルバイト生活を営むフリーターの間にどのような心理的類似点、相違点があるのかを分析することは新しい試みであると同時に、今日の青年期の心理的特徴を考察するうえで貴重な資料となると考えられる。本研究は筆者らの研究グループが行ったフリーターと大学生を対象とした2つの調査結果を報告し、今日の青年期の心理特性について考察することを目的とする。

2. 調査1：自我強度と人生満足度に関する調査

1) 目的と方法

本調査は、(1) 大学生とフリーターの自我強度と人生満足度の比較、および、(2) 自我強度と人生満足度のそれぞれの関連、(3) 人生満足の内容を明らかにすること、を目的とした。調査方法は自我強度の測定についてはBarron (1953)⁴⁾ がMMPIから開発した自我強度尺度(Ego-strength Scale)を使用し、人生満足度については1985年Dienerらによる人生満足度尺度(Satisfaction With Life Scale :SWLS)⁵⁾を用いた。また、人生満足の内容については、5項目の自由記述式質問項目への回答を分析した。各尺度の詳細を以下に述べる。

①自我強度尺度(Ego-strength Scale)

MMPI(ミネソタ多面人格検査)の追加尺度として68項目を経験的に選び出し、Barronが1953年に作成した心理測定尺度である。この尺度は本来(1) 身体の不健

康度 (2) 精神衰弱 (3) 宗教的態度、(4) 道徳心の強さ、(5) 現実感覚の欠如、(6) 適応力の欠如、(7) 恐怖心の強さ、という七つの項目尺度から成るが、青年期の自我強度と人生満足度を研究した長尾 (1996)⁶⁾ は日本の青年には一貫した宗教的な態度はないであろうとの判断から宗教的態度を除外し、また、人生満足度に関する質問内容との重複を考慮して、精神薄弱の項目も除外している。本調査においても、長尾に従い、自我強度尺度は五つの下位項目から成る合計20の質問項目で構成された質問紙を用いた。「はい」「いいえ」「わからない」の3件法で得られたデーターを得点化し、得点が高いほど自我の強度が弱いと判定される尺度である。

②人生満足度尺度 (Satisfaction With Life Scale : SWLS)

1985年Dienerらによって作成された。主観的幸福感のうち、特に人生についての肯定的な認知側面を測定できることが特徴である。我が国で、この尺度を使用した調査研究は少ないが、妥当性と信頼性は作者らにより検証されている他、アメリカにおける大学生や高齢者を対象とした調査において精神測定尺度としての有用性が検証されている (Diener 1985, Adams, 1969)⁷⁾。評定は5項目からなり、7件法で得られた回答を得点化し、高い得点の得られた対象者について、人生満足度は高いと評定する。

③人生満足についての自由記述

②の人生満足度尺度は人生についての主観的幸福感を点数化できる点で有用ではあるが、その具体的な内容を検討するため、幸福感を感じる時やこれからの人生の展望、過去の自分への体験への評価、現況のとらえ方など、以下の5項目の質問に対して自由記述という形で回答を求めた。

質問1 あなたは何をしている時にしあわせだと感じますか？

質問2-a あなたにとって、これからの目標とは何ですか？

質問2-b その目標を達成するためには何が必要だと思いますか？または、どうすればよいと思いますか？

質問3 あなたがいままでの人生でもっとも頑張ったといえることは何だと思いますか？

質問4 あなたは自分の今現在の状況をどう思っていますか？

2) 調査対象

調査の対象は大学生75名、フリーター60名の合計135名。大学生69名 (男性23名・女性46名)、フリーター48名 (男性18名・女性46名) から回答を得た (回収率86.7%)。それぞれを学生群、フリーター群とする。年齢範囲は18歳～27歳、平均年齢は学生群21.6歳、フリーター群22.1歳であった。

3) 調査期間

2000年10月～11月末

4) 結果

①自我強度尺度 (以下Es尺度とする) についての検討

Es尺度についての結果を表1に示す。Es尺度得点の平均値は学生群が低く、フリーター群が高かった。統計的有意差検定の結果は、学生群とフリーター群において有意な差が認められた ($p < 0.01$)。即ち、自我の強さはフリーターよりも学生の方が強いということが検証された。

表-1 自我強度尺度 (Es尺度) について：
学生群とフリーター群の比較

		自我強度尺度得点
学生群(N=69)	M (SD)	36.4(4.40)
フリーター群(N=48)	M (SD)	38.9(4.30)
t 検定		**

** $p < 0.01$

②人生満足度尺度について (以下SWLSとする)

SWLS得点の平均値についてはフリーター群より学生群のほうが高かった。しかし、統計的有意差検定の結果には有意な差は認められなかった。即ち、人生満足度においては学生とフリーターに有意な差はないことが明らかになった。

表-2 人生満足度尺度 (SWLS) について：
学生群とフリーター群の比較

		人生満足度尺度得点
学生群(N=69)	M (SD)	3.8(4.71)
フリーター群(N=48)	M (SD)	2.3(5.02)
t 検定		n.s.

③Es尺度とSWLSの相関について

i) 学生群における相関

学生群におけるEs尺度とSWLSの2尺度について相関を求めた (表3-1)。Es尺度とSWLSの2尺度には相関は認められなかった ($r = -0.232$ n.s.)。

表-3-1 自我強度尺度と人生満足度の相関について：学生群

	Es
SWLS	-.232 n.s.

ii) フリーター群における相関

フリーター群におけるEs尺度とSWLSの2尺度について相関を求めた(表3-2)。Es尺度とSWLSの2尺度に弱い負の相関が認められた($r = -0.396, p < 0.01$)。

表-3-2 自我強度尺度と人生満足度の相関について：フリーター群

	Es
SWLS	-.396**
Pearsonの相関係数 ** $p < 0.01$	

iii) 全対象における相関

青年期としての傾向を知るため、青年期群としてEs尺度とSWLSの2尺度について相関を求めた(表3-3)。Es尺度とSWLSの2尺度に弱い負の相関が認められた($r = -0.329, p < 0.01$)。

表-3-3 自我強度尺度と人生満足度の相関について：全体

	Es
SWLS	-.329**
Pearsonの相関係数 ** $p < 0.01$	

5) 考察

①学生とフリーターに見られる自我の強さと人生の満足度

結果から、自我強度は学生が有意に高いが、人生満足に関しては学生とフリーターの間に有意な差は認められなかった。両者の関連を見てみると、学生は自我は強いものの、人生への満足感とは関係していない。一方で、フリーターの場合は自我の強さが人生への満足感と関係しており、自我の強いものは人生への満足度も高く、逆に自我の弱い者は人生の満足度が低い結果となっている。

学籍の有無に関係なく、青年期として考えると、自我の強さが人生の満足感と関係していると考えられるが、むしろこの傾向はフリーターの傾向を強く反映しているものと考えられる。従って、自我が強い学生であっても、自我の強いフリーターが得るであろうと考えられるほどの満足感が必ずしも得られていない現状であると推測できよう。ここで、これまで検討してきた数量的な検討から、学生の人生満足度とフリーターの人生満足度の内容

の検討に視点を移す必要が有ると思われる。

②学生とフリーターの人生満足度の差異

学生とフリーターの人生満足について、その質的側面を検討するため、自由記述として回答を求めた5項目について以下のような分析を行った。

i) 自我の強さは認められるが、人生満足度が低い学生の事例

学生群のうち、Es尺度下位20位以内かつSWLS下位30位以内を見たところ2事例(事例A.C)が抽出された。また、Es尺度35点以下、かつSWLS下位30位以内から2事例(事例B.D)が抽出された。紙面の都合上、ここでは事例AおよびBについて報告する。(事例AおよびBのプロフィールを表4-1に、自由記述に対するそれぞれの答えを表4-2、表4-3に示す。)

事例Aについては質問4の答えに、現在の状況に満足していないことがはっきりと表明されている。これまでの体験の評価では、高校時代のクラブ活動という具体的なものが挙げられているが、現在の目標やその達成法についてはかなり抽象的な回答となっている。事例Bについても同様に、現在の状況については、もっと充実できるような気がする」と述べられており、現在の状況に満足している状況にはない。また、これまでの体験の評価では大学受験という具体的な事象が述べられているが、現在の目標とその達成法は事例Aと同様に抽象的である。

表-4-1 学生の事例

事例	A	B
性別	男	女
年齢	22	21
Es	33	35
SWLS	0	-1

表-4-2 自由記述に対する事例Aの答え

質問1	食後にコーヒーを飲みながらタバコを吸うとき。
質問2-a	何か大きなことをやってやること。
質問2-b	陰でたくさん勉強し、こつこつ努力する。
質問3	高校時代のクラブ活動。
質問4	満足はしていない。

表-4-3 自由記述に対する事例Bの答え

質問1	天気の良い日に、公園などでボーッとしている時。
質問2-a	何か自分がうちこめるものを見つけること。
質問2-b	積極性。
質問3	大学の受験勉強。
質問4	それなりに楽しんではいるが、もっと充実できるような気がする。

ii) 自我の強さが認められず、人生満足もあまり得られていないフリーターの事例

フリーター群のうちEs尺度上位20位以内かつSWLS下位15位以内を見たところ4事例（事例E,F,G,H）が抽出された。紙面の都合上、ここでは事例EおよびFについて報告する。（事例EおよびFのプロフィールを表5-1に、自由記述に対するそれぞれの答えを表5-2、表5-3に示す。）

表-5-1 フリーター：グループⅠ

事例	E	F
性別	女	男
年齢	21	20
学歴	短大卒	高卒
フリーター歴	2年	2年
Es	44	44
SWLS	-2	-9

表-5-2 自由記述に対する事例Eの答え

質問1	本屋をうろついたり、ウィンドーショッピングをしている時。
質問2-a	なりたいたいものになること、自立すること。
質問2-b	物事を、もっとよく知る。
質問3	高校受験
質問4	たぶん人生の中で一番フラフラしているクラゲの様な時期。ロングバケーション。

表-5-3 自由記述に対する事例Fの答え

質問1	友人らとバカ騒ぎしてる時とか。
質問2-a	全くない、目標なんて考えたことがない。でも就職はしたいな。
質問2-b	仕事を探すしかない。資格をとるとかかな？
質問3	ないに等しい。
質問4	最低... 1からやり直したいと思う。

事例Eは問5の現況についての質問に対し、クラゲ・ロングバケーションという表現で、現況の不安定感を答えている。これまでの評価として高く挙げられるのはやはり高校受験という具体的な取り組みであり、目標は自立という大変抽象的なテーマになっている。その達成法もまた抽象的であり、この抽象性は先の学生的事例に共通していると考えられる。

事例Fについても、問5の現況への評価、問4のこれまでの体験の評価は大変低く、目標はかすかに就職となっている。目標達成については資格をとるという具体的な目標に触れられてはいるが、仕事、就職とその内容はまだまだ抽象的である。人生満足の得られていないフリーター群についても、人生満足の得られていない学生

群と同様に、目標とその達成方法が抽象的な記述になっている。

iii) 自我の強さが認められ、人生満足も得られているフリーター事例

F群のうちEs尺度下位20位以内かつSWLS上位25位以内を見たところ5事例（事例I,J,K,L,M）が抽出された。紙面の都合上、ここでは事例IおよびJについて報告する。（事例IおよびJのプロフィールを表6-1に、自由記述に対するそれぞれの答えを表6-2、表6-3に示す。）

表-6-1 フリーター：グループⅡ

事例	I	J
性別	女	男
年齢	19	25
学歴	高卒	専門卒
フリーター歴	1年	7ヶ月
Es	33	30
SWLS	7	10

表-6-2 自由記述に対する事例Iの答え

質問1	満船につかっている時。
質問2-a	貯金50万目標
質問2-b	働いて給料にほとんど手を付けずに節約する。
質問3	高校3年最後のテスト
質問4	けっこう満足している。

表-6-3 自由記述に対する事例Jの答え

質問1	自分の好きな事をしているとき。人をもてなすとき。気のゆるせる仲間とすごす時。
質問2-a	自分の目標に向かって進む事。自分の店をもつ事。
質問2-b	1つでも多く勉強。人脈を増やす。
質問3	(空白)
質問4	まだ納得していません。これから納得する事は無いでしょう。つねに日々勉強です。

事例Iの回答では、現況に満足していることが述べられているが、目標やその達成手段が極めて現実的で具体的である。先の人生満足度の低かった2群に比べ、目標とその達成方法が大きく異なっている。これまでの体験の評価（問3）においても、かなり具体的な回答になっており、この具体性が、現況の具体的目標と行動にまで保持されていると考えられる。事例Jについても同様に、目標が自分の店という具体物として挙げられており、その達成方法についても人脈を増やすことと目標に密着した課題を挙げている。フリーターの中で、このような具体的な目標とその目標達成のための手段が明確である場合、満足度は高いと考えられる。

以上の分析から、自我が強いと考えられる学生とフリーターとの差異は、目標とその目標達成のための手段の抽象度、言い換えれば具体性の程度によるのではないかと推察された。事例の多くが、これまでの体験で評価できることに受験やテスト、クラブ活動などを挙げており、具体的な課題達成を大きく評価していることから、この具体的課題が抽象化すると、たとえ自我が強くとも満足度は低下するのではないと思われる。

3. 調査2：不安感と生き甲斐に関する調査

1) 目的と方法

本調査は、(1) 大学生とフリーターの不安感と生きがい感の比較検討および、(2) 不安感と生きがい感のそれぞれの関連を検討することを目的とした。調査方法は不安感の測定についてはSpielberger (1966)⁸⁾が開発した状態・特性不安検査 (State-Trait Anxiety Inventory) を使用し、生きがい感の測定についてはCrumbaughとMaholick (1964)⁹⁾によって開発された生きがいテスト (The purpose in life test:以下PILと略す) を使用した。各尺度について以下に述べる。

①不安尺度 (STAI)

不安を測定するための検査としては、顕在性不安検査 (MAS) やCAS不安診断検査、モーズレー人格検査 (MPI) のN尺度など、多くの不安検査があるが、比較的安定した性格特性としての不安感が測定される尺度であった。しかし、感情としての不安の流動的側面に着目したCattellらは、独自の因子分析によって不安に2因子を抽出し、これまでの不安研究で対象となっていた特性不安に加え、新たな因子を状態不安 (state anxiety) と命名した。Spielbergerがこの二つの因子により詳細な検討を加え、状態不安と特性不安を別々に測定する本尺度を1970年に完成させた¹⁰⁾。

本調査では中里・水口が翻訳・作成した日本版 (三京房出版) を使用した¹¹⁾。状態不安尺度 (Form X-1) と特性不安尺度 (Form X-2) はそれぞれ20項目から成っており、4段階の評定尺度である。X-1 X-2ともに、高得点は高い不安を表わしている。

②生きがいテスト (PIL)

人間における根本的な動機を「意味への意志」であるとするFrankl (1969) は、人間は自分の人生に独自の感覚を与える意味や目的を求める存在であるため、意味や目的を見いだすことに失敗すると、「実存的空虚

(existencial vacuum)」を体験するとした。さらにこの空虚の状態は主に退屈、倦怠となってあらわれ、この状態が続くと「実存的フラストレーション」になるとしている¹²⁾。この実存的空虚を測定するためにCrumbaughとMaholick (1964) によって開発されたテストがPILである。本調査で使用したものは、PartAは質問紙法 (20項目)、PartBは文章完成法 (13項目)、PartCは自由記述 (1項目) から成っている。

本調査ではPartAのみを得点化し、PartBとPartCは個別の検討に用いた。PartAは7段階の評定尺度であり、得点が高いほど、人生において明確な意味・目的意識をもっていると評価される。日々の生活で充実感、達成感を経験していると評価されることになる。

2) 調査対象

調査の対象を表7に示す。大学生49名 (男性14名 女性35名)、フリーター38名 (男性14名、女性24名) から回答を得た。それぞれ学生群、フリーター群とする。

表-7 対象者の内訳

	男子 (名)	女子 (名)	計 (名)	平均年齢 (才)
学生	14	35	49	21.4
フリーター	14	24	38	22.4
計	28	59	87	21.8

年齢範囲は18歳～27歳、平均年齢は学生群21.4歳、フリーター群22.4歳であった。

3) 調査期間

2000年10月～11月末

4) 結果と考察

①STAIについての検討

i) 状態不安 X-1

STAI X-1についての結果を表8に示す。

表-8 STAI (状態) の学生群とフリーター群の比較

	平均	標準偏差	t 値
学生 (N=49)	41.71	8.72	
フリーター (N=38)	43.34	11.65	-0.72 ^{ns}

平均値では学生群に比べてフリーター群の方が高い不安を示す得点となった。しかし両群の比較においては平均値の間に有意な差は認められなかった (t値 -0.72 ns)。即ち、状態不安は学生とフリーターでは変わらない。

ii) 特性不安 X-2

STAI X-2 についての結果を表9に示す。

表-9 STAI (特性) の学生群とフリーター群の比較

	平均	標準偏差	t 値
学生 (N=49)	48.12	9.98	
フリーター (N=38)	50.13	12.88	-0.79 ^{n.s}

学生群、フリーター群ともに平均値は高不安を示している。平均値では学生群に比べてフリーター群のほうが高い不安を示す得点となった。しかし両群の比較においては平均値の間に有意な差は認められなかった (t値 -0.79 n.s)。即ち、特性不安においても学生とフリーターでは変わらない。

②PIL (PartA) についての検討

PartAについての学生群とフリーター群の比較を表10に示す。平均値は学生群がフリーター群より高かったが、両群の間に有意な差は認められなかった (t値 1.55 n.s)。即ち、人生の意味や、目的についての意識は学生もフリーターも変わらない。

表-10 partAの学生群とフリーター群の比較

	平均	標準偏差	t 値
学生 (N=49)	93.67	14.84	
フリーター (N=38)	87.18	22.29	1.55 ^{n.s}

③PILとSTAIの相関

i) 学生群のPILとSTAIの相関

学生群のPILとSTAIの相関を表11に示す。学生の生きがい感と不安感については有意に強い負の相関が認められた ($r = -0.582$, $p < .01$)。即ち、生きがいを感じている場合には不安感は弱く、逆に生きがいを感じていない場合は不安感が高くなるという結果を得た。

表-11 学生の生きがい感と不安感の相関

	STAI (特性)
PIL (part A)	-0.582**
Pearson の相関係数	** $p < .01$

ii) フリーター群のPILとSTAIの相関

フリーター群のPILとSTAIの相関を表12に示す。フリーターの生きがい感と不安感についても学生群と同様に有意に強い負の相関が認められた ($r = -0.674$, $p < .01$)。即ち、フリーター群についても生きがいを感じている場合には不安感は弱く、逆に生きがいを感じていない場合は不安感が高くなるという結果を得た。

表-12 フリーターの生きがい感と不安感の相関

	STAI (特性)
PIL (part A)	-0.674**
Pearson の相関係数	** $p < .01$

④PIL (PartB) についての検討

i) Part Bによる検討

PILのPartBは13問の文章完成法から成っている。それぞれの回答を以下のような筆者らの規準に分類し、各群に占める比率を検討した。即ち、第1の規準は「目的・目標探し」についての態度であり (以下P群の分類とする)、＜1＞生きる意味への探求・模索をしている群と、＜2＞今を生きているの2群に分類した。さらに第2の規準は「生活における姿勢」についてであり (以下Q群の分類とする)、＜A＞視野が外向きな獲得志向、＜B＞ただその日の出来事をこなす、＜C＞ただ時間のままに努力がないという3群に分類した (表13)。

表-13 partBの区分基準

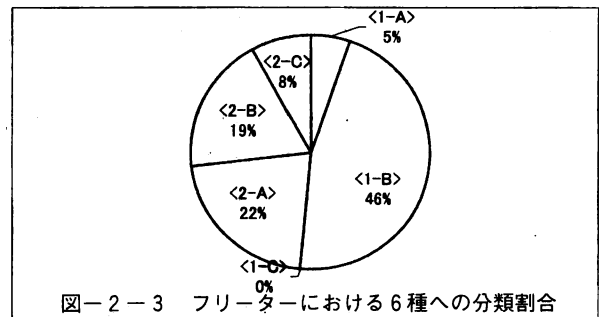
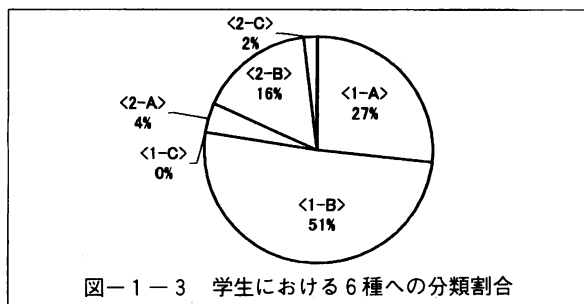
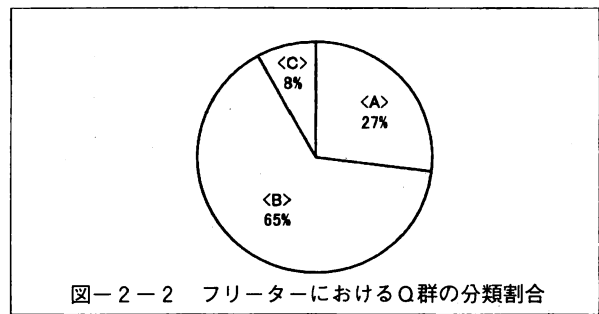
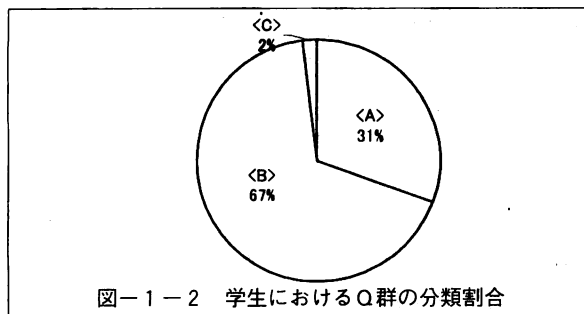
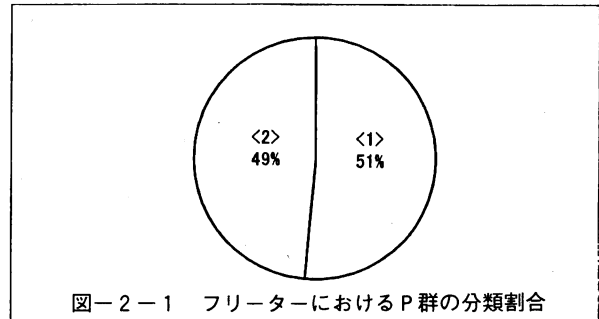
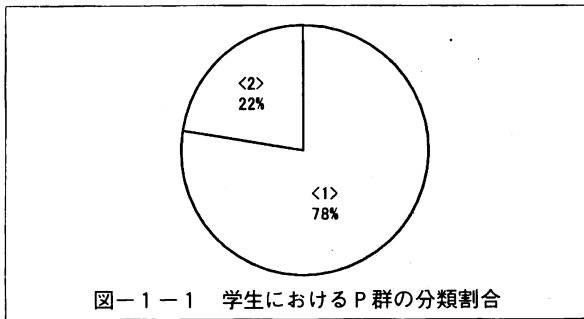
P 群 目的・目標探し	Q 群 生活における姿勢
＜1＞：生きる意味への探求・模索	＜A＞：視野が外向きな獲得志向
＜2＞：今を生きている	＜B＞：ただその日の出来事をこなす
	＜C＞：ただ時間のままに。努力がない

これらの分類にしたがって、学生群とフリーター群の結果を表わしたものが図 1-1 1-2 1-3・図 2-1 2-2 2-3である。

両群の最も大きな差異はP群の分類による結果である。学生群の場合は分類＜1＞が78%を占め、生きる意味への探求・模索をしている割合がかなり高い。一方で、＜2＞今、この時を生きようとする態度は22%と低くなっている。つまり、学生では未来に向かっての模索という態度がかなり強くなっている。フリーター群の場合は学生群に多かった意味への探求や模索の態度は51%と学生群に比べては低く、逆に今この時を生きようとする態度は49%と高い。

また、Q群についての結果は、フリーター群の＜C＞時間のままに努力がないという分類項目が高くなっており (8%)、学生群ではこの群の割合が非常に低くなっている (2%)。

P群、Q群の分類の割合を見ていくと、学生群では1-A群が多く、フリーター群では2-A群の占める割合が多くなっている。即ち、学生群では未来に向けて、生きる意味の探求や模索が行われ、そのような態度が社会的に具体的な事項の獲得に向いている一方で、フリーター群は生きる意味の探求や模索が今現在の状況に対し



での具体的獲得志向となっている。

ii) Part Cによる検討

Part Cでは、人生の目的や目標についての自由記述となっている。Part Bの結果より、学生群とフリーター群ではそれぞれ未来への獲得志向と、今現在への獲得志向という特徴が認められたが、そのような特徴が、この項目ではどのような記述になっているのか、具体的回答を以下に挙げる。

事例1

やりがいのある仕事につき、人の役に立つことをしたい。人の話を聴いて共感できる人間になりたい。そのために大学院に進んで、もっと勉強しなくてはと思う。今の大学に入学し、勉強できることはとても幸せなことだと思っている。<学生>

事例2

自己表現をするために、今の年代はすごく悩んでいる。就職するのかしないのか、一生続けていくのかどうか、など。しかし、生きていくために仕事ぬきでは生活していくことすらできない。仕事に自己実現を兼ねている。<学生>

事例3

自分のやりたいことをして、やりたい職につくこと。この大学に入って卒業すれば実現できと思っていた。しかし、実際は違って、大学を卒業してもやりたい仕事につけない。大学での勉強とは全く関係のないところで、いろいろな資格とか取らなければならないことを知って、今少し失望している。もう望みはかなわないのではないかと思う。<学生>

事例4

写真の世界で名前を残したい。まだ10分の1かあるいは100分の1ぐらいしか実現できていないと思う。

<フリーター>

事例5

アクセサリーや服等、着飾るものに関心が高く、何らかの形で生かしていきたい。現在からこの先もずっとの気持ち。<フリーター>

5) まとめ

本調査においては、不安や生きがいの程度については、学生とフリーターの間に差異は認められなかった。しかし、生きる意味への探索や、獲得志向についてはその方向性が若干異なっていると考えられた。即ち、学生が今、現在の状況よりもむしろ、未来に向けての抽象的な獲得志向型である一方、フリーターの場合は現在の状況を重視した具体的な獲得志向型であると考えられた。

4. 総合考察

これまでの青年期研究では、大学生は大学という組織に在籍したまま、アルバイト活動などを通して様々な社会的体験が可能な時期であり、それらの体験を通じて、自分の志向する職業あるいは役割の現実を知り、自らの適性を吟味するといった猶予期（モラトリウム期）にあると考えられてきた。従って、青年期にあつて既に職に就いている者（勤労青年）にはこの心理的モラトリウムは当てはまらなないと考えられることが多かった。職に就いている勤労青年はもはや職を選択し、自分を社会に位置づけているのであるから、心理的モラトリウムは終了しアイデンティティ形成を深める時期に入っていると考えられていたのである。

この点を確認しようとしたMunro, G. and Adams, G.R. (1977)¹³⁾は大学生30名と勤労青年27名に対して調査を行い、学生よりも勤労青年の方がアイデンティティを達成している者が実際に多いと結論づけた。しかし、両群のアイデンティティ形成には若干の違いが観察されている。即ち、大学生にはMarcia (1966)¹⁴⁾の述べるアイデンティティ拡散 (40%)、モラトリウム (33.3%) という同一性地位が多いのに対し、勤労青年はアイデンティティ達成 (44.5%) とモラトリウム (25.9%) が多くなっているという。彼らは、大学生にアイデンティティ拡散型が多い背景として、開放的で柔軟な大学というシステムの中では学生の経験はむしろ観念的なものとなり、彼らの考えがまとまっていくには長い時間が必要であるためとしている。一方で勤労青年については労働の世界が実際のであり、「善・悪」の見方が強調されるため、このような違いが生じていると予想している。

さらに、日本では1977年に小此木啓吾が『モラトリウム人間の時代』を発表し¹⁵⁾、若者文化の出現と青年期の延長から、当時の日本にはそれまでの古典的なモラトリウム心理から新しいモラトリウムの心理が出現してきていると指摘した。古典的なモラトリウムが「青年が社会的現実から一步距離をおいてその自我を養い、将来の大成を準備するという明確な目的をもった猶予期間」であったのに対し、新しいモラトリウムを「そのような目的性は希薄化し、本来なら社会的現実と対立するはずの猶予状態そのものが次第に一つの新しい社会的現実の意味をもつようになった」と分析した。そして、「古いもの」の継承を目的とするだけでなく、むしろ「新しいもの」の発見や創造を目的としはじめたことから高学歴社会に見られるようなモラトリウム期とモラトリウム機能の重視に至ったのだと述べている。

小此木の指摘に従って考察すれば、学生は「大学生」として過ごすモラトリウム期が社会的にもますます尊重され、長期化する一方で、既成のものを試行錯誤的に体験するというこれまでのような方法から新しい創造的な試行錯誤的体験を目指す傾向が強まっていったと考えられる。このように考えれば、大学生生活の間にE.エリクソンが指摘した同一性獲得の課題を達成することは、以前に比べてかなり困難な作業になると推測されよう。先のPIL PartCにおける事例1に認められるように、目的を見いだした後であってもさらなる期間の延長（大学院への進学）が必要である。今日増加している大学を終了した後の専門学校入学も同様に考えられる。一方でこれまでの青年期研究で頻繁に取り上げられているステューデント・アパシーや近年の引きこもり現象の増加は、先に述べたモラトリウム期の複雑化に関係した危機的状況の重篤化であるとは考えられまいか。

1970年代より増加してきたフリーターはこのようなモラトリウム期の複雑化を背景として生じてきている。

本調査においては、学生とフリーターでは自我強度において有意な差は認められたが、人生の満足感や特性不安、状態不安、生きがいについてはその程度に有意な差は認められなかった。すなわち、学生とフリーターでは学生のほうが自我が強いと言えるほかは、両者に差異は認められなかった。進路選択、選抜試験という競争原理をくぐり抜け、大学生となった者のほうが全体としては自我の力は強いという結果は、ある程度予想された結果であった。ところが、この自我の強さと人生の満足度には関係が認められなかった。小此木の指摘したモラトリウムの変化からすれば、大学生というモラトリウムにおいて、新しさに価値をおく創造的な試行錯誤的な経験は

4年間という短い時間の中で統合されることは難しく、当人にとっては大学生活の満足感にはつながらない経験としてとらえられている可能性がここでもあらわれていると考えられる。PIL PartCの事例2と3で認められる迷いと失望はこのような大学生の不安定な状況を端的に現しているものと考えられよう。

また、生きる意味への探索や、獲得志向については本調査でも学生の未来志向とフリーターの現在志向という差異が認められるとともに、学生では相関の見られなかった自我の強さと人生の満足度にフリーターの場合は相関が認められた。つまり自我が強いものほど人生に対して満足を得ているという結果になっている。このような結果と先から見てきた現代におけるモラトリアムの変化から考察すれば、これまでフリーターは定職に就かない若者という視点だけが強調されてきたが、現代においてはモラトリアムの新たな側面がフリーター現象にあらわれているのではないかという仮説を提出することも可能ではないかと考えられる。即ち、現代における大学生としてのモラトリアムの過ごし方に対するアンチテーゼとして立ち現れてきた現象であるという解釈である。PIL PartCでの事例4と5の記述においては自身の現在の具体的な志向を未来に生かそうという方向性が明らかである。

先に述べたように、大学生の目的と目的達成の手段が抽象的である一方、フリーターの目的と目的達成の手段が具体的であった点も、大学生としてのモラトリアムの過ごし方とは異なるあり方であると考えられる。このように考えると、大学に籍を置きながら、資格修得のために専門学校に通学するという学生の増加も理解可能となる。彼らは大学生としてのモラトリアムを生きながら、本調査でフリーターに認められたような現代のモラトリアムの生き方を取り入れているのではあるまいか？

よって、これまでフリーターという一群としてとらえられていた青年群は、1)先に述べた大学という枠組みの中で同一性の獲得に失敗し、さらなる延長のためにフリーターとなったもの、2)大学生としてのモラトリアムの過ごし方に疑問を持ち、積極的にフリーターとなったもの、3)何らかの理由で大学という枠組みに入らず、フリーターとなったものという三つの群に分類されることが考えられた。特に1)については複雑化した大学生としてのモラトリアム期の延長として、2)については複雑化した大学生としてのモラトリアム期へのアンチテーゼとしてとらえられ、以上の点から現在増加しているフリーター現象には、1970年代より変化してきたモラトリアム期を通過するための新しい形態という側面のあることが、

本調査により明らかになった。

5. おわりに

本調査から、小此木の指摘した新しいモラトリアム期は現代においては既にさらに新しい段階に移行していると考えられた。今日の社会情勢のなかで、青年達はモデルを失い、さらに新たな価値観の創造に向かわざるを得ない状況となっている。大学生は短い時間の中で困難な課題の達成を余儀なくされ、モラトリアムの時間延長と重篤な危機的状況の狭間に位置している。フリーターの増加が、新たな青年期の通過形態を示している可能性を本稿では指摘したが、このようなモラトリアムの形態が今後の心理的課題の達成にどのような影響を及ぼすかは定かではない。慎重な追跡作業が必要であるとともに、このような青年達の現状を理解し、大学のあり方や、社会的な理解と支援を整備していくことも、現代社会の課題ではないかと考えられた。

文献

- 1) 労働省:『平成12年版労働白書』2000
- 2) 社会審議会:『社会的な援護を要する人々に関する社会福祉のあり方に関する検討会』報告書 2000
- 3) 1)に同じ
- 4) Barron,F.: An ego-strength scale which predicts response to psychotherapy,17 1953
- 5) Diener,E.,Emmons,R.a.,Larsen,R.J.&Griffin,S.:The satisfaction with life scale,Journal of Personality Assessment,49,1985
- 6) 長尾 博: 高校生女子の人生満足度に及ぼすエレクトラ・コンプレックスと自我の強さとの影響度の比較カウンセリング研究 第31号 1998
- 7) 5)に同じ
- 8) Spielberger,C.D.: Theory and research on anxiety.In C.D.Spieberger (ed.) Anxiety and behavior.New York,Academic Press.1966
- 9) Crumbaugh,J.C. and Maholisk,L.T.:An Experimental study in existentialism:The psychometric approach to Frankl's Concept of noogenic neurosis, Journal of clinical Psychology,20,pp.200-207.1964
- 10) Spielberger,C.D.,Gorsuch,R.L.,&Lushene,R.E.: SATI manual. Polo Alto,Calif.Consulting Psychologist Press.pp.23-49.1970.
- 11) 水口公信・下仲順子・中里克治:日本版STAI使用手引き 三京房 1991

- | | |
|---|--|
| 12) Frankl,V.E.: The will to Meaning:Found ations
and Applications of Logotherapy.New American
Library.1969 (大沢 博訳『意味への意志』 プレ
ーン出版 1979) | Developmental Psychology,13,pp.523-524.1977 |
| 13) Munro,G. and Adams,G.R.: Ego-Identity Formation
in College Students and Working Youth. | 14) Marcia,J.E. : Development and validation of ego
identity status. Journal of Personality and Sotial
Psaychology,3,pp.551-558.1966 |
| | 15) 小此木啓吾 『モラトリアム人間の時代』中央公論、
10月号、 pp.64-102 1977 |

Summary

This paper is a study on investigations about the psychological characteristics of university students and free part time jobs who are the same human development stage, adolescence. We carried out two psychological investigation sheets for them.

One is about the ego-strength and the satisfaction of their life. The ego-strength of university students was higher than that of free-part time jobs, but there was not a difference of the satisfaction about their life between the two groups. Further, in free part time jobs group, the ego-strength and the satisfaction of their life were relation with each other. In other words, one with high ego-strength feels high degree satisfaction of their life.

In the other hand university students, ego-strength and the satisfaction of their life were irrelevant to each other.

The other investigation is about anxiety and the purpose in life. These degree were the same in two groups.

We expect that this study makes a contribution to adolescence studies of today.